

唱導文学の系譜に関する一考察

関 山 和 夫

一

国文学の研究対象として、「唱導文学」という呼称を最初に使用されたのは、折口信夫氏であり、その後、唱導説経が日本文学に与えた影響について続々と論考が発表されるようになった。それらの論考は、筑土鈴寛氏、菊地良一氏らは「唱導文芸」という呼称を用いて文芸的に考察、論究されたところに特色があり、永井義憲氏は「日本仏教文学」として国文学研究の上に新分野を開拓された。これらの諸先覚の御論考の中で、私が特に注目したいのは、民俗学・芸能史の研究の立場を踏まえて唱導文学を追及しようとした折口氏の方法である。同氏の日本芸能史に関する御研究の該博さは、今更述べる必要もないほど卓越したものであるが、唱導そのものについては必ずしも深く掘り下げて追及された訳でもない。しかし、折口氏の唱導に対する鋭い御着想は、まことに斯道の研究方法の核心をつくものであり、心から敬服せざるを得ない。以下の小論は、折口氏をはじめ諸先覚の論考を踏まえつつ、更に視野を日本説教史の研究考察の上に拡げ、国文学史の特殊研究として卑見を披瀝しておきたいと思う。

唱導が、中国において盛行したことは、梁の慧皎撰『高僧伝』卷十三の「唱導」の一部が詳細に唱導の意義と縁由について述べている。わが国においても平安末期から鎌倉にかけて最も隆盛となり、日本文学、芸能の上に多大の影響を与えている。

もとより唱導説経は、経典や教義を講説して民衆を教化するのが本来の目的であって、決して文学や芸能として発生したものではない。しかし、生きた説経が民衆の中に浸透するためには様々な手段が採られ、自然に豊かな文学性と芸能性を具備して来たことは当然の結果であった。経を巧みに説くためには何よりも優れた話術が要求される。その話術が単なる「はなし」だけでなく、節付による歌謡性を有するようになれば、必然的に芸質を備える。そして遂には一般芸能と同様の形態を整えてしまう。説経浄瑠璃や祭文等は、そういう経路で成立したものである。

古来説経の重点は、演説にあったことが、異称の多いことで容易に考えられる。即ち「談義」「説法」「法談」「法話」「講釈」「講談」「説経」「説教」「唱導」等様々である。これらを今は統一して「唱導」と称することにしたい。唱導が、文学といわれる所以は、唱導に「表白体」のものと「演説体」のものと二種類があり、

「表白体」の方には、定式に基づく文章が用意され、然もそこには厳格な修辭法が要求され、流麗な文章を以て上等とされたことから、豊かな文学的表現が生れたからである。この優れた唱導文は、説經の実演上の貴重なテキスト、台本として使用された。それを説經師、唱導家たちは巧みに会得し、自ら脚色もして口演したのである。そして実演に当っては、聴衆の心を傾倒させるため自然に身振り手振りが必要となってきた。凡そ唱導説經には、經典の意味や教旨を拈め、分り易くするために、必ず譬喩を用いて喝采を得る手段が用いられていた。

説經の弁法としては、その初期の在り方について具体的に知る資料は乏しいが、普通その宗派の所依の經典を説く場合、第一に經名解題、經典の由来等を講じ、内容によって判釈を行い、譬喩談を興味深く聴かせる。また追福追善の法要の時などは、その法会の事由を説明し、法句を唱え、生死流転・諸行無常の理を示し、死者を讃えたり、悲嘆の辞を述べたり、施主に対する儀礼的な褒言を述べたり、更に増上菩提の句の廻向文を唱えるのである。これには散文もあり、韻文もあり、津々たる興味を覚える。^⑧

この内容を指して、今、私は敢てこれを「唱導文学」と呼ぶ。日本仏教における「唱導文学」の系譜を辿りつつ、その特色の一端を以下考察しておきたい。

二

文献学的に説經の歴史を眺める場合、最古のものは、推古天皇六

年（五九七）既戸皇子の勝鬘經講であり、説經師らしき名称としては、天武天皇十四年かと言われる知識經の『金剛場陀羅尼經』巻一の奥書にある「教化僧宝林」という記事である。但し、その説經の具体的な方法については知る術もない。

中古に入れば、唱導説經の在り方が漸次明瞭となって来る。『法華修法百座聞書抄』または略して『百座法談』と呼ばれる法隆寺所藏の古写本一卷は、平安朝の説經の方法を知り得る唯一の資料であり、これに依れば、講師とその登座順序等説經の形式をかなり深く窺知することが出来る。また『令義解』にも古い説經の方法が記され、斯道究明の端緒を把むことが出来る。

平安時代には、山門、寺門、南都に所属する説經の達人たちが続々と輩出している。

『二中歴』の第十三、「名人」の条に

説經	賀縁阿闍梨	湛然同	静昭	法橋
	院源座主	寛印	供奉	源心
	慶意	律師	清範	律師
	源泉	僧正	維尊	法橋
	湛円	阿闍梨	慶範	供奉
	源泉	僧正	維明	阿闍梨
			己上	三井寺

とある。当代の碩学が多いことは注目すべきである。特に院源は、彼自らの伝記的逸話が後世の唱導話材となったほどである。院源は藤原道長の帰依厚く、道長が薨じた時、導師をつとめた。その際の心情を披瀝した表白文の一節が『栄花物語』の「鶴林」にみえ

る。『今昔物語』卷十九・第四話に

説経ノ間、時ノ縁来ル程ニヤハ有ケム。守（源満仲Ⅱ関山註）
説経ヲ聞テ音ヲ放テ泣ヌ。守ノミニ非ズ、館ノ方ノ郎等鬼ノ様ナ
ル心有ル兵共皆泣ヌ。

とある。けだし説経の名人であったのであろう。平安時代の説経
聴聞のことどもは、当時の公卿の日記に屢々見られる。『今昔物語
』『栄花物語』『中右記』等は唱導についての示唆に富む。『今昔
物語』卷二十八・第七話では、有名な山門の座主教円の唱導を

物可咲ク云テ人咲ハスル説経教化ヲナムシケル

と述べて、教円が絶大なる笑いの提供者であったことを教えてい
る。同時に「説経師」という専門の職業が既に平安時代にスターの
座を獲得していたことをも教える。その古い資料として考えられる
のは、『伊勢集』下帖の歌の詞書に「せきう法師が和泉ノ講師ニナ
リテ流サレシ時」とあることである。つまりこの頃既に「せきう師
（せ経師Ⅱ説経師）」なる呼称が存在していた。「講師（こうじ）
」という公儀の師に対して「説経師」という私称の名儀があったこ
とに注意すべきである。『実方朝臣集』に「三条院にてせ経せられ
し日ひとつものおほくみゆるを」と言い、『拾遺集』卷二十哀傷に
「左大将済時白川にて説経せさせ侍りけるに」と記すなど十世紀末
には「せ経師」なる語が頻出してゐる。

講師と説経師の区別は、比較的はっきりしていることもある（講
師ⅡA級・説経師ⅡB級）が、必ずしもそうでない場合もある。混
用の例を屢々見る。『簾中抄』下、仮名起の条に、法華八講の講師

として有名な清範と慶祚の弁説が賞讃されている。『河海抄』十二
梅枝にも同様の記事が見える。ところが『枕草子』では「講師」と
は言わず「説経師」というのが多い。『源氏物語』は、殆ど「講師
」と称して「説経師」の用例は少い。何れにしても平安時代に
おける唱導説経の盛行ぶりがしのばれる。

三

平安末期から鎌倉時代にかけての説経の名人には澄憲（天治二年
八一二五Ⅴ―建仁三年八一二〇三Ⅴ）がある。彼は初めその家学
である儒学を修めたが、後に天台の宗義を研究し、天台座主明雲が
伊豆に流される時、国分寺まで送ってから一心三観の血脈を相承し
た。（『平家物語』等）その後、澄憲の第三子の聖覚がその業を継
承したのである。

澄憲は、名門藤原家の出身で、父は少納言信西入道、母は高階家
の出身。出家して最初延暦寺に入り、早くから弁才を以て名声を博
し、承安四年（一一七四）五月に最勝講義に列席して縦横無尽に弁
論を吐き、その右に出るものはなかったといわれる。『尊卑分脈』
に註して「四海大唱導一天名人也。此一流能説正統也」と賞してい
る。澄憲は、法体の身を以て老体で結婚し、十人の子供があったが、
何れも真言、天台の高僧となっている。澄憲の著作には『源氏表白
文』『法滅の記』等がある。澄憲の行実は『玉葉』に特に詳しく記
され、『明月記』その他の諸記録にも屢々その名が見えている。

澄憲は、単なる唱導家として高名であったというだけではない。

その豊かな教養と識見並びに行政的手腕は高く評価されていた。九条兼実が彼の才能を大いに買っていたことが『玉葉』に見える。また澄憲の名声を高めた記事が『源平盛衰記』巻三に見えることは周知の事実である。

澄憲は、優れた弁舌を以て不朽の名声をとどめて建仁三年八月に没したことが『業資王記』八月十日の条に見える。

澄憲の子聖覚も能説父に劣らず、正統の学を修すると共に文筆にも長じ、後に浄土門に帰してからは、浄土宗では聖覚のことを説経念仏義の祖としているほどである。藤原定家が聖覚の死を惜しんで『明月記』（嘉禎元年二月二十一日）に「濁世富樓那。遂為還化之期者。実是道之滅亡歟。悲而有余。今年六十九云々」と述べていることは、彼の人望の並々ならぬことを実証している。

澄憲が京都の安居院に住していたことからこの唱導説経の流れを「安居院流」と呼び、聖覚から隆生、憲実、憲基と子孫まで相承したので、安居院流の唱導は後世に影響するところ頗る大であった。この系譜を芸能史の立場からみると、所謂説経者の家元であり、中世から近世を経て明治に至るまで主として浄土宗、浄土真宗―特に真宗―に型が伝承されたのである。

この安居院流は、唱導の技術の面だけではなく、ユニークな教学上の立場を誇示していたことが想像される。浄土宗の教学では、一念義・多念義等と同様に聖覚の教学を「説法義」という。安居院流の唱導について櫛田良洪氏は「唱導と釈門秘論」の御論考^⑧の中で「確かに中世に唱導と名づくべき一つの新興仏教が生まれ、天台でも

真言でもない一の型態を採っていた。その説く所は絶対三学思想、法華超八の思想、諸行往生思想にも依りながら、時には一向専修弥陀本願思想を説いて、真俗一貫、信心為本の道理を説かんとしたものである。旧来の型式を打破し、造寺造塔の功德を否定したのではなく、却ってこれを肯定して転正の因となし、諸行はさらに深妙であると説いて、専ら欣求浄土への往生を期待せしめんとした。即、唱導は観念理観の旧来の仏教にも讚し難く、称名念仏の新思想のみを説くことなく、時と処と機根を異にして世俗の文学、放言綺語を以て讚仏乗の転法輪の縁とせんことを目的としたものである」とその特色を述べられている。

この安居院流に対して、三井寺派という唱導の一派があった。『元亨釈書』唱導の条下に澄憲と並称される定円が祖である。この派もまた子孫相継いで一流を為したが、近世に入って衰退した。定円についての詳しい資料は今のところ乏しいが、『拾珠抄』や『願文集』巻二等に定円唱導の表白文が掲載されている。澄憲の才気溢れる見事な迫力に比較して、重量感のある落ち着いた文体をみせている。やはり名文といえる。今日、三井寺派の資料が見当らなくなったのは、殆ど安居院に吸収されてしまったからであろう。『井蛙抄』六には、澄憲と聖覚が夫々特色を有つ語り口で能説の誉が高かったことを記しているが、安居院流の唱導が誇り高く伝承されるについては、当然秘伝口授の方法が採られたものようである。天台宗全書所収の『法則集』上下二帖に安居院流の信承法印の「口伝云：…」という形式による唱導のルールが記されている。これが秘伝で

あることは、後人筆の奥書に「此書者安居院信承法印制作矣。可秘可秘。唯受一人云々」（永仁六年三月二十六日書写之）とあるから余りにも明白である。安居院流唱導文集については、『言泉集』が著名であるが、未翻刻のものがかなり残されているようである。

何れにしても、説経師が流派を立てたのは、澄憲、定円あたりからであることが『元亨釈書』にみえている。

四

唱導を専門の職業とするものたちが、如何なるものであったかは、『枕草子』『源氏物語』『今昔物語』『大鏡』『沙石集』『つれづれ草』等が述べているのであるが、それが民衆教化のために漸次俗化の途を辿り、芸能化（話芸化）していった経緯については『元亨釈書』の「音芸志」が詳しく述べて批判している。つまり、唱導説経師たちは、次第に品下り、身首を動かし、ゆるがし、奇妙な節付けをして芸人化していったのである。説教の話法として後世「五段法」（讚題・法説・譬喩・因縁・結勸）が採られ、その中でも譬喩・因縁談が聴衆をひきつけるための最大の手段とされたことは、唱導説経が日本芸能、殊に話術・話芸の主流をなして歴史的展開を遂げたことをも意味している。「初めしんみり、中をかしく、終り尊く」などという説教話術の伝承は、既に古く平安の頃から行われたものであろうと思われる。口頭唱導については『打聞集』や『百座法談』等とその古い姿を見ることが出来る。口頭で行う唱導説経の中で、仏典講説の譬喩の部分が発達して、説話的色彩を濃く

したことも事実である。

『今昔物語』卷二十・第三十六話に

板敷ニ上テ中ノ間ニ居テ曰ク、貴キ仏事修スト聞キツレバ結縁セント思テ来ツル也トテ、手ヲ押シ摺テ講師ニ向テ、疾ク申シ上ゲ給ヘト勸レバ、講師先下ノ国人ノ限リト聞ツレバ、暗ノ夜ナドノ様ニ思エツルニ此守年老タレバ昔ノ説経共ヲモ吉ク聞キ集メタルム、又才モ只今ノ極メタル者ナレバ可然キ因縁譬喩モ聞キ知タルム、然レバ此レガ聞クニ才施シテ令聞ムト思テ、音ヲ拳テ扇ヲ開キ仕ヒ、如意ヲ高ク捲リ、肱ヲ延テ令説ム

とあるのは唱導説経の在り方の一端を知る資料として興味深い。

唱導説経の譬喩・因縁談は、確かにはなしを面白く聴かせるのだが、飽くまでも仏教本来の民衆教化の精神から逸脱したものでなかつた。ただ近世に発達した落語・講釈・祭文・ちよんがれ等の芸能が無かつた中世以前においては、大衆の娯楽的要求を受けとめるだけの用意が唱導説経の方でなされねばならなかつたのである。従つて安居院流と三井寺派は、唱導説経家の流派として並び立ち、天下の弁説者のモデルとなつていたことは間違いないと思われる。そして、この流れから様々の芸能が生まれたことが容易に考えられる。説経浄瑠璃・平曲・祭文・ちよんがれ・落し噺・講釈・アホダラ経等は総てこの唱導説経の系譜に発するものと私は考えている。^⑥

唱導説経が如何に聴衆の興趣をそそるものであつたかは、前述の如く『元亨釈書』に「変態百出、揺身首婉音韻」とあり、更に「欲感人心、先或自泣、痛哉、無上正真之道流為詐偽俳優之伎」と非難

していることでも明瞭である。説経本来の真面目な教化活動から逸脱して、興味本位な説話的要素をもったものが盛行したのである。

これは見方によっては口誦文芸の分野を開拓し、日本芸能史上特に話芸の発達を促進したことになる。教化のため、あるいは信仰的効験のための唱導が、因縁譬喩談に力を注ぎ、ついには巧みな演出を伴った話芸に転じたことは注意せねばならぬ。その唱導の変化は、音芸などという部類立てまで受けてしまったのである。

全国各地を広く遊行する音芸者たち―琵琶法師・絵解法師・物語僧・熊野比丘尼らが仏教的な唱導ばなしや唱導の語りを持ち歩いたのは、日本の大衆芸能史を究める上では特に重要なことである。勿論これら遊芸人たちの中には、唱導説経師の変貌墮落したものも含まれていたことが察せられる。

唱導説経師が高座に登っての話法は、前述の『百座法談』『打聞集』等にもその形式や方法が多く紹介されている。前者によれば、天仁三年（一一一〇）に大安寺において法華経その他の經典が三百座にわたり百数十日を要して行われている。そこでは巧妙な話法を以て唱導説経の形式が見事に整備されたであろうことが推察せられるのである。

五

講師とか説経師とか呼ばれるものは、中古・中世においては重要な職責であった。しかし寺院内の職柄が貴族たちによって占められた時、既成教団の権威と綱規は乱れた。『朝野群載』には永延二年

（九八八）の出来事として「今、近年の間、奢侈の輩憲法を慎まず率ゆるところの従類各二三十人、多きをもって楽となし少きをもつて恥となす。志禪定に背き、旨放逸に渉る」（原文漢文）と述べている。これが十二世紀に入ると寺院の世俗化は一段と高まってしまい、講師・説経師は難解な經典講釈や法門講談を好まなくなってしまう。僧たちも教理の研鑽を怠るようになった。『愚管抄』にはすべてさすがに内典外典文籍一切経などもきらきらと有んめれど、ひはのくるみをかかえ、隣の宝を数ふると申すことにて、学する人もなし、さすがに殊に其の家に生れたる者は為しなんと思ひたれどその義理をさとる事はなし

とある。こうした世相を反映して説経は益々娯楽風の唱導が盛行していったのである。

唱導説経の隆盛は、真面目な学僧たちにとってはまことに腹立たしいことであつた。それは真摯な仏教教化の精神にもとるものであり、つつしむべきものであるとして、最も強烈に批判したものが十三世紀から十四世紀にかけて出現して来た。『元亨釈書』の著者・虎関師鍊（一二七八―一三四六）である。

既述のごとく唱導は、治承、養和の頃の澄憲及び寛元の頃の定円を以て二流の祖とし、天下の唱導説経師は、総てこの二つの家元に所属しようとしたのだが、余りに芸風に流れ過ぎた姿を見ての学僧虎関師鍊の嘆きは当然のことである。だが吾々は『元亨釈書』の唱導批判のみを見て、当時の説経教化の様を鵜呑みにしてはなるまい。

『元亨釈書』の唱導非難に対して、同じ禅僧でありながら逆に唱

導を弁護したのもあったのである。無住一円（一二二六—一三一一）がそれである。無住は『沙石集』巻六「説経師の強盜発心せしむること」において「弁説は無間の業を転ず」と発言して唱導の功德を称讃している。これは注目に値する重要な記事である。無住が尾張長母寺において「尾張万歳」の基礎作りをしたという伝説を名古屋に残すのも頗る興味深いことである。

従来、唱導説経を論ずるには、多く『元亨釈書』に見える唱導批判だけが引用され、如何にも芸風説経が邪道であることのみが論ぜられて来た面がある。しかし、それとは逆に実際には唱導説経は繁栄するばかりであった。つまり唱導は芸能的・文学的性格をもつことによって、説話の具象性と興趣の集団性の上で中世の新しい階層をひきつけてやまなかったのである。この唱導が、中世の神道教団にも採りあげられ『神道集』などという作品を産出したことは周知の事実である。御伽草子の『物ぐさ太郎』や『蛤の草子』などにも唱導的言辭が継承されるのは、ひとえに唱導が文芸、文学的、芸能的性格を内在した結果といえよう。芸能化した唱導が尚、唱導文学としての姿を復元してみせているのも興味深いものがある。

弁説によって人を感動させるということは、人間だけに与えられた特権である。唱導説経や和讃等が時に変形した姿をみせるのは、一面それらの民衆化を意味するものであろう。説経の芸能化は、日本文化史、日本芸能史を論ずる場合既に動かすべからざる歴史的事実を作り上げてしまっている。鎌倉末期、室町初期には、唱導説経師で本来の説経から脱化した芸風説経の専門家が出現し、鉦を叩き

ながら歌い、語りながらササラを摺り、胡弓を弾き、近世初期には三味線を付加して、いわゆる歌説経としての説経浄瑠璃を創造していった。また高座説教も笑わせる要素が別の形態を作りあげ『醒睡笑』の著者安楽庵策伝（一五五四—一六四二）のごとき噺家の祖とまでいわれる説教僧を生み出すこととなっていった。また歌うように節付をして述べる唱導は、芸能化して、ちよんがれ、祭文からアホダラ経となり、ついに浪花節にまで発展していった。經典講釈もまた太平記読み・心学道話等と合流して講談としての特殊な形態を作りあげていったのである。

要するに、唱導説経には二つの系列があるといえる。即ち一つは純粹經典講釈、オーソドックスな教化の系列で、文学としては「法語」と呼ぶ一群の書を記述した人師たちである。この唱導は、性格においては極めて思索的である。独自の個の宗教的信仰の世界で自己を深く追究する。法然・親鸞・日蓮・道元・栄西・一遍らの中世仏教の祖師たちは、「法語」という唱導体において、言葉における論理性とそれに裏うちされた説教の働きを達成することに力があつた。

そして今一つは、芸能性をもった唱導説経の系列である。安居院流・三井寺派の系を引く唱導説経は、近世に入ると他の芸能と並行して愈々繁栄した。主として浄土宗、浄土真宗で盛行したのだが、殊に真宗では著しい進展ぶりをみせたのである。近世において唱導説経に関する書物は多数出版されているし、未翻刻の写本も夥しく残存している。『唱導三百年眼』『説法鈔撮』『説法用歌集』『荊葦行状』『蓮生法師伝記』『さんしょう太夫事蹟考』『隅田川鏡池

伝』『中将姫行状』『文覚上人行状』『小野小町行状』『石山軍記』『箱根物語』等々々唱導説経の台本、テキストの類が夥しく刊行されて流布している。

ところで、中世・近世の唱導は、日本文学の上に如何に影響したであろうか。少なくとも説話文学殊に仏教説話集の成立について考察する場合には、唱導の世界を先ず考えてみなければ理解出来ないであろう。戦記文学の文体形成も明らかに唱導の影響を受けていると思われる。平曲なども、琵琶法師の出現前に既に唱導説経師が多数の天竺・唐土や本朝の仏教説話をひろめていたことも注意されねばなるまい。

近世における唱導が文学や芸能に与えた影響は極めて大きい。説経の中に入っている譬喩因縁談と説話文学、高座説経と話芸とは全く紙一重で、時には説経の技術の方が芸能を上廻ることがあり、研究の角度の変え方によっては、受けとり方が著しく異って来るのである。現在、唱導文集の中で翻刻紹介されているものはかなりあるが、未翻刻のものも頗る多い。これらが漸次翻刻されるに従って、唱導の本質も次第に明されて来るであろう。唱導文学と敢て名付けて、その系譜を辿ることを述べたのは、唱導の研究が今後の日本文学研究の上で極めて重要な位置を占めていることを強調したかったからである。今はただ管見に触れた乏しい資料と先覚の示唆により、今後の私の研究課題の一端を披瀝しておくにとどめたい。

註① 『折口信夫全集』第一巻

② 筑土鈴寛・永井義憲・菊地良一氏等の業績を指す。

③ 永井義憲氏『日本仏教文学』等々。このことに関しては、古く「東大寺諷誦文稿」についての山田孝雄・筑土鈴寛両氏の解説がある。

④ 蘭田宗恵氏「法隆寺より得たる説教史料としての古文書に関して」(宗教研究大正5)

筑土鈴寛氏「唱導文芸としての百座法談」(岩波講座付録文学7・7)

山岸徳平氏「法華修法一百座聞書抄」解題(古文学秘籍複製会発行9・4)

菊地良一氏「口語りの説話について」(文学26・9)

佐藤亮雄氏「中世文芸における仏教受容の一形態」(宗教文化26・6)

禿氏祐祥氏「天仁三年の法談聞書」(竜谷史壇、27・2)

真鍋広済氏「百座聞書をめぐる諸問題」(文学・語学6)

⑤ 『玉葉』『明月記』『平家物語』『尊卑分脈』『源平盛衰記』『古今著聞集』『倭歌作者部類』『法然上人行状絵図』『長西録』『浄土総系譜』『業資王記』等。

⑥ 印度学仏教学研究、1・1

⑦ 現存する伝本として紹介されているもの。

1、比叡山真如藏本(江戸中期写本)

2、大屋徳城氏旧藏本(天文の写本。影写本竜谷大学蔵。現蔵者不明。)

3、金沢文庫藏本。

⑧ 拙著『説教と話芸』

⑨ 拙著『安楽庵策伝』

⑩ 拙著『説教と話芸』